

修士論文(要旨)
2017年7月

論文指導に見られる日本語の訂正フィードバックに関する考察
ー中国語母語話者による日本語のエラーを中心にー

指導 青山 文啓 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
215J3006
鄒 京娜

Master's Thesis(Abstract)
July 2017

An Analysis of Corrective Feedback of Japanese in Seminar Papers: Focusing on the
Japanese Language Errors of Chinese Native Speakers

Jingna Zou
215J3006
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J.F.Oberlin University
Thesis Supervisor: Fumihiro Aoyama

目次

第1章	はじめに.....	1
1.1	研究背景・目的.....	1
1.2	本論文の構成.....	3
第2章	先行研究と本研究の考察対象.....	4
2.1	教室活動における訂正フィードバックについて.....	4
2.2	中国語母語話者を対象とする日本語学習の訂正フィードバックの使用傾向.....	4
2.3	本研究の研究対象.....	5
第3章	調査概要.....	6
3.1	データの収集方法.....	6
3.2	文字化の原則.....	7
第4章	中国語母語話者の日本語学習に現れるエラーに対する研究.....	10
4.1	中国語を母語とする日本語学習者のエラーに関する研究.....	10
4.2	論文指導における誤用.....	11
4.2.1	文法のエラー.....	11
4.2.2	語彙のエラー.....	23
4.2.3	発音のエラー.....	26
4.2.4	語用論的なエラー.....	31
第5章	論文指導における訂正フィードバックについて.....	37
5.1	文法のエラーに対する訂正フィードバック.....	37
5.2	語彙のエラーに対する訂正フィードバック.....	38
5.3	発音のエラーに対する訂正フィードバック.....	39
5.4	語用論的なエラーに対する訂正フィードバック.....	40
5.5	すべてのエラーに対する訂正フィードバック.....	41
第6章	まとめと今後の課題.....	43
6.1	まとめ.....	43
6.1.1	研究の結果.....	43
6.1.2	本研究の日本語教育に対する意義.....	43
6.1.3	本稿の限界.....	43
6.1.4	エラーの数.....	44
6.2	今後の課題.....	44

参考文献

資料

要旨

中国語を母語とする日本語学習者が日本語能力試験 N1 や N2 に合格していても、実際に日本人とコミュニケーションするとき、うまく自分の意見や気持ちを伝えられず、相手から誤解されることがある。そのような場合、筆者は彼らが何らかの間違いをしたのではないかと推測する。間違いと言っても、発音の間違いあるいは文法上の間違いから、またコミュニケーション場面上相応しくない笑い声や行動まで多岐にわたる。本論文では、学習者が犯した何らかの言語面の間違いを「エラー」と呼ぶことにする。一般的にミスメイクと言われる一時的な間違いもエラーとして扱う。日本語では「誤用」という翻訳があるが、それを正しく直したものを「正用」と呼ぶことにする。

第二言語習得研究の中では、学習者のエラーに対する教師の反応を訂正フィードバック (Corrective Feedback) と呼ばれている。大関ほか (2015:31) は訂正フィードバック研究について、「教室内 SLA (Second Language Acquisition)」や「指導を受ける環境での SLA」と呼ばれる研究分野に位置していると述べている。

Lyster and Ranta (1997) および大関ほか (2015:42-45) では、以下のように訂正フィードバックを 6 種類に分類し、それぞれ以下のようにまとめられている。〈1. 明示的訂正〉とは、正用を学習者に明らかに伝えるフィードバックである。その中には学習者の発話に対する否定があり、続いて学習者が意図した内容の言語的に正しい表現の提示もある。そして、〈2. リキャスト〉とは、談話の流れを妨げないように、相手が意図する意味内容をさりげなく正しく言い直すフィードバックである。また、〈3. 明確化要求〉とは、話し手を再度発話させるために、「もう一度言って」、「～は何ですか」などによって促すフィードバックである。さらに、正解を示さず、メタ言語によるヒントやコメントを与えることによりエラーを指摘する〈4. メタ言語的フィードバック〉もある。〈5. 誘導〉とは、誤りの直前で学習者の発話を繰り返し、自ら修正して正しい表現を使わせるフィードバックである。最後に、誤用表現を上昇イントネーションでそのまま繰り返すフィードバックを〈6. 繰り返し〉という。〈3. 明確化要求〉、〈4. メタ言語的フィードバック〉また〈5. 誘導〉、〈6. 繰り返し〉という 4 種類のフィードバックは明確に正用を提示せず、学習者の自己訂正を促す働きをするので、本研究ではそれらを〈プロンプト〉とまとめる。

論文指導が中心となる演習の授業(以下ゼミと呼び)では、日本語教育を専攻する中国語母語の学習者が過半数を占めており、文法や発音を始め、頻繁なインタラクションの中で、様々なエラーが引き起こされる、そのようなエラーが教室でのコミュニケーションを妨げないとは言えない。指導教員がそれらから目を逸らすと、学習者の運用能力を伸ばすことは期待できない。さらに、重大なエラーが放置されることに対しては学習者自身も教室外の場面でネイティブとコミュニケーションする際に、本当に伝えたいことが伝えられないことにもなりかねない。

本研究で考察した論文指導における教員と学習者のやりとりでは、教員は論文指導そのものに加えて、学習者の日本語のエラーに対して、学習者が意識し、最終的に自己訂正できるよう導く場面が頻繁に見られる。この論文指導における訂正フィードバックの仕方は、一般的な外国語学習、特に会話を中心とする教室活動における教師の訂正フィードバックとは、様々な点で異なる点が見られ、考察に値する。

外国語学習における訂正フィードバックの研究は、これまで、主に英語の教室活動における教師と学習者の会話によるやりとりの場면을対象に行われてきた (大場 2010 ; Lyster and Ranta 1997)。しかし、実際に日本語の論文指導を受ける環境での訂正フィードバックに関する研究については、筆者の知る限り、まだ十分とは言えない。訂正フィードバックの与え方は、会話を中心とする教室活動と論文指導の場面では、それぞれが最終的に何を目標としているかという点で大きく異なることも影響している。つまり、前者では、目標言語の習得に、後者で

は論文を完成させることに重点が置かれる。本研究では、この点に着目し、日本語の論文指導の際、エラーに対する訂正フィードバックがどのように与えられるのかを明らかにしていく。特に、筆者の所属するゼミの中国語を母語とする中上級学習者を対象に、どのようなエラーが多く現れるのかを調査し、エラーの種類に応じて、どのような訂正フィードバックが与えられているのかを、教室活動における訂正フィードバックの与え方との違いを比較しつつ、考察していく。

中国語母語とする日本語学習者が中心となるゼミでは、まず、「文法のエラー」には、助詞についての〈付加〉や〈脱落〉また〈混同〉が多く現れた。すべてのエラーにおいて、文法のエラーが最も多く現れた。そして、「語彙のエラー」には、動詞と名詞の選択による問題が多く現れた。具体的に言うと、動詞の選択に関わるエラーは、中国語からの直訳であることが一部の原因だと考えられる一方、名詞の選択に関わるエラーは、日本語と中国語の両方にその名詞があり、表す意味が違いため間違える場合が少なくなく、母語干渉が原因だと言える。さらに、「発音のエラー」には、音声に関する雑多なエラーがもっとも大きな割合を占めている。最後に、「語用論的なエラー」には、曖昧な答え方や語の曖昧さによる問題が多く現れた。

学習者のエラーに対し、訂正フィードバックを与える方法は、全体的に言うと、明示的訂正を使う傾向が高頻度で見られる。特に発音のエラーに対する明示的訂正が最も多く現れた。それは音声上の問題が中国語を母語とする日本語学習者にとって、気づきにくい問題であるためだと考えられる。一方、「文法のエラー」には、リキャストを使う傾向があった。発音のエラーから語彙や文法のエラーになるに従って、リキャストの使用回数が徐々に増えてきた。大場(2010:75)では、「学習者の語彙的・音韻的側面より文法的側面の方が学習者の気づきを容易に促せる」と述べている。本研究にもその解釈が当てはまるだろう。さらに、語用論的なエラーに対しては、プロンプトを使う傾向があった。それは中国語を母語とする日本語学習者が使われた用語の曖昧さに関係があり、指導教員はお互いのコミュニケーションを円滑に進めるために意味交渉を頻繁に行ったためと考えられる。最後に、いずれのエラーでも、訂正フィードバックの併用が見られた。特に発音のエラーにおいて、訂正フィードバックの併用が最も多い。

参考文献

- 市川保子(1997) 『日本語誤用例文小辞典』 イセブ
- 大場衣織(2010) 「学習者の間違いと教師による訂正のフィードバックにおける関係性」『神奈川県大学大学院 言語と文化論集』第16号 pp. 35-81
- 大関浩美[ほか](2015) 『フィードバック研究への招待』 くろしお出版
- 島田かおり(2011) 「日本語学習者の誤用分析—中国語話者の事例研究—」『山口大学 人文学部 国語国文学会』第34号 pp. 96-106
- 竹島奈歩(2011) 「中国語を母語とする学習者の作文に見られる誤用分析」『同志社大学 日本語・日本文化研究』第9号 pp. 43-58
- 張麟声(2005) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例—』スリーエーネットワーク
- 中島信夫(2012) 『朝倉日英対照言語学シリーズ第7巻: 語用論』朝倉書店
- 畑佐由紀子・藤原ゆかり(2012) 「外国語としての日本語の授業における訂正フィードバックの効果」『広島大学大学院 教育学研究科紀要第2部』第61号 pp. 229-237
- 松浦沙樹(2010) 「教師の訂正フィードバックの分析」『国際教養大学専門職大学院 日本教育実践実習報告論文集』第1号 pp. 69-93
- Grice, H. P. (1975) "Logic and conversation," In Cole, Peter and Morgan, Jerry (eds.), *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, London: Academic Press. pp. 41-58
- Grice, H. P. (1989) *Studies in the Way of Words*, Massachusetts: Harvard University Press. (清塚邦彦訳(1998) 『論理と会話』, 勁草書房.)
- Lyster, R. and Ranta, L. (1997) *Corrective feedback and learner uptake*: Cambridge University Press. pp. 37-66

参考 URL:

宇佐美まゆみ(2007) 基本的な文字化原則,
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj.htm>
(最新の閲覧日: 2017. 1. 27)